

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：32677

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780315

研究課題名(和文) 若年層のライフコースにおける不平等とその連鎖構造に関する社会学的研究

研究課題名(英文) Sociological Study on Inequality and Its Chain Structure in the Lifecourse of Japanese Youth

研究代表者

林 雄亮 (HAYASHI, Yusuke)

武蔵大学・社会学部・准教授

研究者番号：30533781

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：若年期とは、さまざまなライフイベントを経験する時期であると同時に、若年層内部においてもあるイベントを経験するかしないか、できるかできないかといった格差が存在している。本研究では、さまざまな大規模調査データを用いて、若年層の貧困が一部の層に固定化しているということ、性行動が活発な層とそうでない層に分極化してきたこと、出身背景によって性行動が強く規定されていることなどを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The early life is time to experience a variety of life events. At the same time, there are various kinds of disparities that whether or not to experience a certain life event. In this study, using survey datasets, I argued that 1)the poverty in some of the young people are immobilized, 2)sexual behavior of youth has been polarized into an sexually active and inactive groups, 3)sexual behavior of youth are strongly influenced by their family backgrounds.

研究分野：社会学

キーワード：若年層 ライフコース 貧困 性行動 家族

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、日本社会におけるさまざまな格差や不平等の問題が指摘されるようになった。これらの議論は2つに大別される。第1は、就業を通して得られる所得の不平等、その蓄積である資産の不平等といった結果の不平等である。これは主に経済学の分野を中心に展開されてきた。第2は、高い教育を受ける機会や、より良い職業に就く機会などの機会の不平等である。こちらは主に社会学の分野で盛んに議論されてきた。これらはすべて地位達成過程を舞台とし、個人のライフチャンスや社会的地位がより以前の地位や出身階層によって規定される様を考察するものである。言い換えれば、地位達成過程における不平等の連鎖現象である。

しかしながら、地位達成過程における不平等だけでは現代社会に生きる人々が直面する不平等構造をうまく捉え切れていないと考える。なぜなら、特に若年層にとっては、初職への入職や初期職業キャリアの安定性は言うまでもなく重要だが、時期をほぼ同じくして経験しやすい結婚や家族形成などのライフイベントについても豊かな人とそうでない人が存在するためである。さらにさかのぼれば友人関係や異性との関係にも不平等が存在するだろうし、結婚生活や生活全般における満足感という主観的評価にも不平等があると言えよう。そして、ここに挙げた不平等の重要性は、地位達成における不平等とも関連し、階層的な不平等がライフコースを通じた不利の蓄積を促す可能性があるためである。しかし、ライフコースを通じて経験するさまざまなライフイベントや、他者との関係性における不平等を階層理論的枠組みからアプローチする研究は日本ではいまだ少ない。そこで本研究課題では、古典的階層理論を応用しながら、若年層のライフコースを通じた不平等の連鎖について検討する。

2. 研究の目的

本研究課題では扱う問題群を次の3点とした。

(1) 性意識・性行動の階層的な不平等研究

これは男女交際や性行動における階層的な不平等を考察するものである。研究代表者が調査責任者となって実施した「第7回青少年の性行動全国調査」(2011年度に日本性教育協会が主催し、全国に散らばる中学校9校、高校11校、大学31校、調査対象者数合計7682名に実施)では、性的関心や性行動の趨勢分析に主眼を置くため、継続的な質問項目をメインとして調査票に盛り込んだ結果、出身階層や本人の社会的地位が性行動や性意識を規定する構造を考察することができなかった。しかし欧米の研究では、人種や民族、社会的地位によって性行動の経験率が異なることなどが明らかになっており、日本でも出身階層や学歴の影響に関する社会調査を実施し、実証的研究を行う必要がある。なお、

性行動だけでなく性意識にも着目する動機は、結婚やその後のライフイベントにも連鎖する問題だからである。さらにこの独自の調査に加えて、既存の調査データの2次分析も行う。

(2) 結婚・家庭生活の階層的な不平等研究

結婚について言えば、日本社会で未婚化・晩婚化は社会問題として広く認知され、そこには階層的な不平等があることも明らかになってきている。しかし、結婚生活の安定性における階層的な不平等や、離婚現象の発生における階層的な不平等については、日本で論じられた例は数少ない。その背景として、適切な調査データの不足という研究環境の壁があった。幸いにして、最近になって日本の社会学分野では東京大学社会科学研究所が実施している「働き方とライフコースの変化に関するパネル調査(JLPS)」などの質の高いパネル調査データが整備されてきたため、これを用いて結婚・家庭生活における階層的な不平等をダイナミックに考察する。

(3) 主観的階層研究

このテーマでは生活満足感や幸福感、主観的な豊かさや健康感といった社会意識における階層的な不平等を扱う。具体的には、個人のライフイベント経験や階層的な地位の変化が主観的階層を左右するメカニズムを考察する。これも先述のパネル調査データを用いることにより、横断的調査データでは捉えられない厳密な考察が可能となる。

3. 研究の方法

それぞれのテーマについて横断的調査データ、パネル調査データなどその都度適切なデータの計量分析によって検討する。研究方法は一次分析と二次分析に区別し、二次分析の際には東京大学社会科学研究所SSJデータアーカイブからデータの提供を受けた。

4. 研究成果

(1) 性意識・性行動の階層的な不平等研究

性行動と性意識にかんする階層問題についての大学生調査を2014年、2015年に2回実施した。サンプルサイズはそれぞれ758、1673票であり、ある程度の統計分析には耐えられるデータセットとなっている。調査票には、大学生の性にかんする実態、意識、大学生の親の学歴、職業などの高いプライバシーをとまなう質問を多く設けたが、回収率や質問項目ごとの無回答率も低めに抑えることができていた。基礎分析や調査報告書の作成はすでに終わっており、現在は学会誌への論文投稿の準備を行っている。

また、このテーマにかんする二次分析として、「第2~7回青少年の性行動全国調査」データの時系列分析も行った。その結果、近年において、男女ともに性的関心が低下しているにもかかわらず性行動は活発化している

こと、高校生段階における性行動の進行が著しいことが明らかになった。さらに青少年の性の二極化が生じており、特に女子における「性的関心なし・性交経験あり」というグループの量的拡大は著しく、さらにこのグループは性に対する否定的なイメージが強く、性知識も他のグループに比べて乏しいことが明らかになった。

さらに、青少年の性行動に対する家庭環境の影響を考察し、学会での発表および論文執筆を行った。概要は以下の通りである。

家庭環境には、親の教育レベルや社会経済的地位の高さ、子育て・しつけの厳格さ、きょうだい構成、住環境などのさまざまな要因が挙げられる。親の教育レベルや社会経済的地位の高さ、子育て・しつけの厳格さについては、教育レベルや社会経済的地位が高いほど、また厳しい家庭で育つほど性行動が抑制されると考えられている。一方、母親の影響については別の見方も存在しており、「母親が家にいること（専業主婦であること）が子どもの性行動を抑制する」という仮説もしばしばみられる。きょうだい構成については、年上のきょうだいがいることが年下のきょうだいの性行動を促進する要因になりうる。住環境については、専用の個室を持っていることは、プライベートな空間を保有していることから、性行動を促進させるのではないかと予想される。

分析には「第4～6回の青少年の性行動全国調査」の中学生・高校生のデータを用いた。分析の結果、子どもの性別を問わず、父が「勤め人（事務）」であることに比べて「いない」または「自営」であることは初交経験を促進させ、母が「勤め人」であることに比べて「専業主婦」であることは初交経験を抑制することがわかった。兄・姉がいること、専用個室を持っていることも、本人の性別を問わず初交イベントに対して正の影響を持っていることから、これらの家庭背景はそれぞれ独立した要素として青少年の性行動に影響を与えていることが明らかになった。

（2）結婚・家庭生活の階層的不平等研究

社会階層によって離婚行動に違いが見られるのかという問いについて、第1に、「日本版総合的社会調査（JGSS）」を用いて離婚行動と学歴階層との関連およびその時代変化を考察し、第2に、離婚リスクをあらゆる潜在的な指標として結婚満足度を捉え、結婚満足度が所得階層によってどのように規定されるのかについて、「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査（JLPS）」を用いて検討した。

主な知見は以下の3点である。第1に、離婚は低い学歴階層で発生しやすい。ただし、そうした離婚リスクの階層差は時代的に安定的であったわけではなく、より最近のコーホートにおいて顕著に現れていた。

第2に、夫が高い収入を得ている夫婦ほど、

夫と妻それぞれの結婚満足度が高く、夫の収入の上昇は妻の結婚満足度を高める。つまり、主な家計の担い手である夫の収入と結婚満足度との間には正の関連があり、所得階層の上位では結婚満足度が高く、その結果離婚リスクが低いと考えられる。

第3に、夫婦の合計収入に占める妻の収入比率が20%台である夫婦は、妻の収入比率がより低いグループだけでなく、より高いグループと比較しても、妻の満足度が低い。さらに、妻の収入比率が20%台から乖離していくほど、妻の満足度は低下していく。妻の収入比率が20%台というのは、夫が正社員として働き、妻が「130万円の壁」付近の就業で家計をサポートする伝統的な性別役割分業型の夫婦像にほぼ相当する。こうした夫婦は、他の夫婦と比較して結婚満足度が低だけでなく、現状を変えるとより不満が高まるという負の均衡状態に陥っていると言える。

以上のように、実際に観察された離婚行動と、離婚リスクをあらゆる潜在的な指標としての結婚満足度は、それぞれ階層的要因との間に明確な関連を示した。最後に、離婚リスクの階層間格差に対する政策的介入について考察した。

（3）若年層の貧困についての研究

前述の研究の目的における（3）主観的階層研究に比べて、本研究課題の中心的な議論になると想定される若年層の貧困問題について研究を進め、以下のような知見を得た。第1に、個人収入150万円未満を低所得状態と定義し、若年層内部に広がる経済的不利の現状を確認した。その結果、若年未婚者の約3割は低所得状態にあり、正規雇用以外の雇用形態が低所得状態に陥りやすいことが明らかになった。また低所得状態の経験回数を調べたところ、男性で2～3割、女性で約半数もの人々が少なくとも1度は低所得状態を経験していることから、これは稀な現象ではなく身近な不利だということが明らかになった。

第2に、労働市場への参入時の状況が調査時現在の低所得状態に影響を与えるプロセスを考察したところ、学校から職業への移行において間断があることは初職が正規雇用以外であることに影響し、初職は職業キャリアを通して現職を規定し、現職が正規雇用以外であると低所得状態に陥りやすくなるという不利の連鎖が明らかになった。また初職が非正規雇用であっても現職で正規雇用になることができれば低所得状態へ陥る危険性が低いと予想したが、そのような挽回のチャンスも少ないようである。

第3に、ある時点の低所得状態がその後のライフコースに与える影響について、結婚を取り上げて検証したところ、そもそも低所得状態からは結婚が困難であること、結婚できたとしても結婚後の世帯の経済的水準は低いことなどから、低所得状態がその後のライ

フコースにも負の影響を与えていることが確認された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- (1) 林雄亮・余田翔平、「離婚行動と社会階層との関係に関する実証的研究」、『家計経済研究』、査読有り、101号、51-62ページ、2014年。

〔学会発表〕(計3件)

- (1) 林雄亮、「青少年の性行動と家庭背景」第25回日本家族社会学会大会、追手門学院大学(大阪府・茨木市)、2015年9月5日。
- (2) 林雄亮、「若年未婚者の貧困 要因・持続性と不利の連鎖」武蔵社会学会2014年度年次大会、武蔵大学(東京都・練馬区)、2014年7月19日。
- (3) Hayashi, Yusuke, "Trends in Sexual Behaviors and Attitudes among Japanese Youth: 1981-2011," The 21st Congress of the World Association for Sexual Health, Porto-Alegre (Brazil), 24 September 2013.

〔図書〕(計3件)

- (1) 林雄亮、「現代日本の若年層の貧困 その動態と階層・ライフイベントとの関連」、石田浩(編)『格差の連鎖と若者 第1巻 教育とキャリア』、勁草書房、総ページ数未定、印刷中。
- (2) 林雄亮、「青少年の性行動の低年齢化・分極化と性に対する新たな態度」、日本性教育協会(編)『「若者の性」白書 第7回 青少年の性行動全国調査報告』、小学館、総ページ数255ページ(25-41ページ)、2013年。
- (3) 林雄亮、「日本の家族はどう変わってきたか ジェンダー・性別役割分業・結婚に着目して」、今泉礼右(編著)『グローバル時代の社会学 社会学の視点で読み解く現代社会の様相』、株式会社みらい、総ページ数299ページ(201-220ページ)、2013年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 雄亮 (HAYASHI, Yusuke)
武蔵大学・社会学部・准教授
研究者番号: 30533781